

4. 興味ある肝シンチグラムを呈した症例について

中川昌壮 木下 陽 難波経雄
(岡山大学小坂内科)
桑元淳三
(岡山済生会病院)

演者らの最近の経験例の中から興味あるシンチグラムを得た5症例を報告する。

第1例 34才の男で触診上、左季助部に触れる腫瘍はシンチグラム上陰影欠損として現われ、肝外腫瘍と思われたが剖検の結果、肝左葉の黒色転移であった。

第2例 39才の男で細網肉腫症、上腹部腫瘍あり、肝シンチで第1例同様の陰影欠損となっており剖検の結果後腹膜リンパ腺腫大であった。

第3例 69才の男右季助部腫瘍あり、肝シンチで肝臓腫瘍と思われたが、剖検の結果、横行結腸癌と右横膈膜下膿腫を認めた。

第4例 33才の女で原発性胆汁性肝硬変症。経過を追い2回の肝シンチを行ない、2回目の肝シンチの摂取はほとんどなく、脾のそれに比してきわめて低値であった。

第5例 61才の男で著明な門脈高血圧症を認め、食道静脈離断術を行ない、術前後のシンチグラムを比較し、術後脾陰影の縮小を認め、門脈循環状態の改善を考えさせた。

追加：日下昌平 (倉敷中央病院内科)
Cruveilhier-Baumgarten syndrom の肝スキャンニング、腹腔鏡所見を供覧した。

*

5. RIによる肝疾患時の肝循環に関する研究第6報 体表装着用小型シンチレーション検出器による運動負荷時の肝循環測定について

中川昌壮 木下 陽 難波経雄
(岡山大学小坂内科)
桑元淳三
(岡山済生会総合病院)

演者らは、過去4年間にわたりRI特に¹⁹⁸Au-colloidによる肝循環体外計測を行ない、その成績を核医学会ならびに消化器病学会において発表してきた。特に、臥位から坐位への体位変換に際して、肝集積係数(RL)の変動が、正常対照群では明らかに減少するのに対し、肝疾患

群就中肝硬変症群では不変ないしは軽度増加することを認めた。

さらに、立位ならびに体動時における肝循環動態の変動をみるためにportableである体表装着用小型シンチレーション検出器を試作し、臥位、立位および足踏み歩行時のRLを算出した。それらの成績は一部第6回核医学会総会で発表したが、一般に、臥位から立位になると約20%減少し、ついで足踏み歩行を行なうと血流はやや増加して臥位の約5%減少の程度まで回復することをみとめた。

現在、ergometerによる運動負荷時の肝循環動態の変化について検討中であり、その成績も発表する予定である。

*

6. RIの使用経験(甲状腺機能検査について)

日下昌平
(倉敷中央病院内科)

本院においては、昨年6月、島津 photo-scintiscanner SCC-30形を購入し、¹³¹I、¹⁹⁸Au、²⁰³Hgを用い、甲状腺¹³¹I摂取率、甲状腺、肝および脳のscintiscanningを行なって来た。今回は、約1年間に実施しえた甲状腺疾患患者92名の¹³¹I摂取率、トリオソルブテストの成績について述べ、さらに、¹³¹I治療成績についても若干ふれる。

甲状腺機能亢進症、単純性び浸性甲状腺腫、慢性甲状腺炎、結節性、悪性甲状腺腫、機能低下症の平均¹³¹I摂取率(24時間値)はおおの64.4、21.1、32.1、12.1、25.6%。平均トリオソルブ値は48.5、31.4、35.7、25.7、22.8%であった。機能亢進症以外で異常¹³¹I摂取率を示した例について、T₃-suppression testを行なったが、全例抑制を示した。¹³¹I摂取率、トリオソルブテスト、BMRの三者中、トリオソルブ値が最良の診断適中率を示した。さらに二、三の疾患のトリオソルブ値について検討した。

¹³¹I治療患者22例中、治癒、経過中、不明おのおの17、3、2名で、平均投与量は7.3mCiであった。現在迄、副作用、機能低下を来したものは無い。

質問：阿武保郎(鳥取大学放射線科) 機能低下症の診断基準はどのようにしておられますか。

答：日下昌平 甲状腺機能低下症については、先ず臨床的所見で疑診し、検査成績で裏付けする方針をとっている。¹³¹I uptakeの異常高値を示したのものについては、今回は甲状腺抑制検査のみを行なった、原因については